

「労働組合」基本の基

職場を壊す「無関心」

組合活動をすれば会社から目をつけられる」役員になれば自分の時間が奪われる」といった消極的な意見は以前から耳にしています。が、「コロナ禍」で会社が暴走するいま、本来なら、労働組合への関心が少しは高まってくるもの。しかし、実際にそうはならず、ある組合員の報告によると、会社もおかしいが、過激な主張をするだけで何もしてくれない組合も信用出来ないし意味がない」といったとんでもないことを口にする社員が少なくないとのこと。一体、どういった考え違いをしているのか。今更ですが、**労働組合の存在意義**というのは、**労働法**で個人の権利が保障されていても、絶対的な力の差から一人では会社に**刀打ち出来ないため、みんなの力を借りながら闘えるところ**にあります。つまり、自分の身は自分で守る姿勢が基本であり、何もせず全て組織まかせでいるのは、自ら権利を放棄しているようなもの。組合に意味がなくなるのも無理はありません。過激？生活がかかった局面において、おしとやかになる人間などどこにもいません。活動には参加せずに文句だけを言う。こうした**無責任**をはじめ、労働組合について正しく知ろうとしない社員が多いことこそが**問題点**ではないのですか？

「組合費」が高い？

国労の組合費は高い」という他労組社員による言いがかりは、今に始まったものではありませんが、これは、九州だけでなく全国共通のこと。ただか数百円の違いに対して、なぜこれほどまで大げさに主張するのかと、こちらが腰を抜かしてしまいます。が、この数百円を惜しむ考えの根本には、間違いなく、組合費さえ払えば、あとは全て組合側が面倒を見てくれる」といった**甘え**があります。これではまるで**税金**です。私たちに**とって、組合費**とは、**前述した労働組合の趣旨から、自分で闘い、時にはそれを組織的にフォローしてもらうために必要な軍資金**です。組合費を払うからには、自分で何かをしよう」と考えるのが真っ当な感覚であり、組織に全て丸投げするだけなら数百円どころか**組合費全額**を無駄にしているのと同じ。それで、私たちは、組合費が安いから得している」と考えるのはいかなるものでしょうか。このように、労働組合に対する根本的な認識の違いが、労働者間のすれ違いを生んでいると言えます。



おすすめの書籍

15歳からの
労働組合入門

東海林智 著
毎日新聞出版

若年労働者が置かれた「貧困の現場」を告発しつつ、労働組合を通じて働く希望を取り戻す道を提示する画期的ルポタージュ



第 164 号
2022年 7月1日
発責 国労九州本部

博多区博多駅東3丁目9番3号
ニッコーハイツ1003号
JR 092-2075
NTT 092-483-1515